

## 結チーム

# 継続性とコミュニケーションツールとなる作陶方法の開発と活用

担当・文：齋藤敏寿



参加者と学生が協働して制作中

継続的な活動を構築するために、東日本大震災と福島第一原発事故により避難をされた方々と学生との協働で「結の器プロジェクト2014」を企画運営した。

1. 継続性とコミュニケーションツールとなる作陶ワークショップの開発と運営
2. ワークショップで作成した桜の花模様の(杯と碗)を使用した食事会イベントの開催

### 活動の概要

#### 目的：

2013年に実施した「結の器プロジェクト」参加者と学生の協働による企画運営

- ・継続的な活動となる為の手法を構築する。
  - ・コミュニケーションツールとしての作陶方法を創造する。
- 結の器プロジェクトは、東日本大震災と福島第一原発事故により、様々な背景を持って、つくば市で生活されている方々とつくば市民等を対象に、つながりの強化と新たなつながりを育むための活動を目的とした。

#### 対象：

つくば市で避難生活をしている方々とつくば市民など。

#### 方法：

- ・「思い出の桜」をキーワードとしたデザインを創造した。
- ・2人1組となり型成形を使用して、対になった杯と碗を協力して作成した。
- ・「結の器」作陶ガイドブックを作成し活用した。

- ・去年の参加者や学生にも連絡をし、完成した器を使って食事会を開催した。
- ・新たなつながりを育むこころみとしてワークショップ参加者以外の方に完成した「桜の花模様の杯」を招待状として贈り、食事会に招待した。

#### 結果：

作陶過程を協働で行うことにより、コミュニケーションが構築され昨年からのつながりの強化や新たなつながりが得られた。制作ガイドブックを作成し、活用することで上(粘土)から成型方法、装飾、焼成、完成までの作陶過程すべてを初心者でも理解しやすくなり、作陶に対する理解が深まり、完成した器への愛着が深まった。器を使用した食事会や、作成した桜の花模様の杯を食事会の招待状とし、杯を人切な人に送ることで新たな繋がりツールとなった。コミュニケーションツールとして作陶を通し、参加者以外の人と人のつながりも育まれた。

### 1. はじめに

つくば市には、東日本大震災、福島第一原発事故の影響で福島県、岩手県、宮城県から、197世帯、493名の方々が避難をされ生活されている(2015年1月)。2013年の「結の器プロジェクト」に参加された方々との繋がりを手掛かりに今年度の活動を計画した。2012年の並木チームの『結』というキーワードを継承することを指針に、作陶を活動の中心としメンバーを募った。学生構成は芸術4名。また履修単位とは関係なく有志1名の学生(情報メディア創成)が参加した。

### 2. 活動内容、経緯

#### ●視点構築演習1～4回

「結の器プロジェクト2013」に参加された西内重夫さん(福島県双葉町)、佐藤徳二郎さん(福島県富岡町)に授業の2回目から参加していただき、去年の活動について、避難された経緯など学生に情報を提供してもらいチーム活動方針、内容、課題を検討した。そこで、今年度のチームの活動方針をつながりの強化、新たなつながりとした。また「思い出の桜」をキーワードとすることが決定された。



WS実施に向けて型成形の実施と運営方法の検討

『結』『新たなつながり』『つながりの強化』『思い出の桜』をキーワードに以下の課題を設定し、学生と共に活動内容を検討した

#### 問題解決：

やきものを媒介として『結』と『つながりの強化』となるには？  
1回のイベントで終わらない『結』とするためには？  
『思い出の桜』を器に取り込むためには？

#### 情報発信：

『つながりの強化』をするためのシステムとは？  
『新たなつながり』を育むためのシステムとは？  
プロジェクトの指針を伝えるためには？

#### 評価：

実施した成果をどう評価するか？  
結果を検証し、評価するためには？

### ●視点構築演習5～10回

昨年に引き続き、作陶を活用した『結』となる運営方法の開発とつながりを育む活動を企画することが決定され、型成形という技法を使用して、杯と碗の器を作成することが決まった。作陶方法(型成形)の説明とサンプル制作を行い、WS実施へ向けて問題点、課題などをまとめた。桜の花模様の杯を制作する方法として、練りこみ技法\*を活用することとした。また、完成した器を使用した食事会の開催と器を参加者の大切な方へ贈る仕組みを検討し実施することが決定された。

#### \*練りこみ技法とは

色の異なる粘土を練り合わせて、模様を作る技法を「練り込み」という。今回は濃度の違うピンク色の粘土を作成し桜の花模様の練りこみ板を作った。その練り込み板を杯の型に使うことで桜の花模様の杯を作成した。白いベースにピンク色の桜が咲いている状態とピンクのベースに白色の桜が咲いているデザインとした。



WSで使用する道具など



桜の花模様の練りこみを制作する

6月20日に行われた報告会で結チームとして活動方針を発表した

- ・発表に対して以下のコメント等があった。
- ・器の招待状を送る際、割れたりしないように
- ・参加者の創意を重視しそれを引き出せるような仕組みを考えることも必要ではないか
- ・継続的に活動を行うにはどうするのか



## 新たな問題点と解決方法の検討

### ●コミュニケーションツールとして作陶を活用した方法を創造する

⇒完成した器を大切な人に贈る。

完成した器で食事をする。

「結の器」作陶ガイドブックの作成

結の器コンセプト：球から2つの器へつながるかたち



ガイドブックの結の器プロジェクトについて

## 3. リサーチ

チームとして、現場ヘリサーチした日程は以下に示すとおりだが、教員、学生個々に原発事故のその後、双葉町、南相馬市、浪江町、大熊町の復興計画や歴史文化について、相馬焼の現状、浜通り地区の現状などをリサーチし、情報共有を行った。また去年に引き続きつくば市に避難されている方々すべてに今回のプロジェクトを告知する目的と個人情報保護の観点から、つくば市総務課に結の器プロジェクト企画の広報などの協力を依頼した。

7月11日、7月31日

対象：つくば市役所総務課

## 4. ミーティング

チーム全体ミーティングの他に広報班、WS準備実行班、食事班に別れて実施体制の検討と準備をした。SNSの活用としてFacebook、LINEに結チーム専用ページを作成し、各班の進行具合、会議に出席できない学生へ情報の共有を心掛けた。

演習授業日が終了してから、各自のスケジュールを把握することの難しさが露見し、計画を遂行することと、全体ミーティングの集合日の設定など調整に苦心した。

## 広報について

・ポスター、チラシ制作

・避難されている方への資料郵送をつくば市役所へ依頼

⇒つくば市に避難されている方全員へ通知

(個人情報保護法に配慮)

・参加希望者への対応

・参加者への通知、連絡



結の器プロジェクトポスター

## ワークショップの実施について

- ・ワークショップ作業での使用物品、材料の検討と調達
- ・ワークショップ当日の作業工程及び説明方法の検討、説明用マニュアルづくり
- ・器のサンプルづくり
- ・ガイドブックの作成



ワークショップで使用したガイドブックの一部

## 食事会

- ・食事会の着席レイアウトの検討
- ・食事会の献立検討(福島県の郷土料理を1品はつくる)
- ・参加者との協働と実施体制の構築

## 5. 実施

WS実施日は以下に示した通りだが、今年度は4名の学生が広報(チラシ、ポスター制作、広報実施ポスター掲示、チラシの郵送、参加者への連絡調整、アンケート作成)からワークショップ実施の粘土の調達、釉薬の選定、道具の調達、制作ガイドブックの制作、サンプルの制作、桜の花模様の練りこみ板の準備など相当な時間をかけて事前準備を行った。ワークショップを成功させる為に事前準備がいかにか

切か、学生は多くを学んだことであろう。また作品完成後の桜の花模様の杯を大切な方へ贈る為のパッケージ作業では、参加者の皆さんに手紙を書いてもらい、同封するなどつながりの強化や、新たなつながりへとても有効であった。食事会では、参加者から野菜などの食材を提供していただき、おにぎり、汁物などを協働で料理した。

## ワークショップ実施日程

9月14日(日)10:00~16:00 制作(成形)

9月21日(日)13:00~16:00 釉薬付け、窯詰め

9月28日(日)13:00~16:00 窯出し、器を贈る会

10月19日(日)10:00~16:00 食事会



自己紹介と趣旨説明



桜の花模様の杯(練りこみ技法を活用した)



熱心に説明を聞く参加者



2人協働で制作



制作風景



釉薬つけ作業(希望者が参加)



完成した杯をパッケージして大切な人に贈る





つながる器を持って記念撮影



参加者と学生協働で食事会の準備



食事会風景

参加人数 総計：51名  
出身地：双葉町、楡葉町、富岡町、南相馬市、  
いわき市、つくば市



参加者との集合写真

## 6. 評価

当初の目的、計画を遂行できた点と、プロジェクトを行ったことによる次年度の新たな課題が示せた点をどの様に評価するかが、今後への継続的な課題である。

今回のプロジェクトの評価は以下があげられる。

- ・出身地の異なる方々及び昨年参加された方々とのつながりの強化ができた。
- ・つくば市に避難されてきた方すべてに、今回のようなイベントがあることを知らせることができた。
- （参加者への告知を早く行うことが来年度の課題）
- ・作成した器を新たなつながりのアイテムとして食事会の招待状にした。
- ・練りこみ技法を活用することで器のクオリティーが前年度より向上した。
- ・WS、食事会以外での参加者の自主的な交流があった。
- ・継続的な活動とするための土台作りができた。
- （作陶方法の確立など）

## 7. 今後の展望と課題

去年のプロジェクトに参加してくださった方々と企画の段階から学生と一緒に運営をすることで、1回限りの関係から来年度以降へ継続的につながる為の筋道と方法の構築が必要である。震災から4年半が過ぎる来年度は、継続性とプロジェクトのパッケージ化を行い、プロジェクトを行う場所が変化しても活動でき、チーム指針の根幹であるつながりの継続と新たなつながりの方法を確立することが最大の課題である。

- ・プロジェクトが継続的に活動するために  
⇒今回のシステムの展開  
（初対面の方と協働でつながりのある器をつくる）  
プラン1 今回参加した方々と一緒に福島県いわき市などでイベントを開く。
- プラン2 別の土地で初めてあった人と制作を行う。
- ・作陶を通してつながりの強化が可能となる方法の開発  
⇒つくったものを人にプレゼントして新たな広がりをつくる  
プラン3 器を招待状にして食事会を企画することの拡大。

## 8. おわりに

結の器プロジェクトは、単発的なワークショップで完結しない活動を目指している。しかし授業運営として課題もたくさん残る。演習授業の形態、年ごとに替わる学生間の繋がり。しかし、確実にこのプロジェクトを継続して行うことで、時間をかけて残っていく陶器のようにじわじわとつながるプロジェクトとなるように来年度の活動を考えていきたい。



プロジェクト参加学生

芸術3年 三宅映未、永野真未、小田島果咲、野口悠梨  
有志：情報メディア創成4年 森田 諒  
TA 大学院芸術2年 村井隆宏

プロジェクトメンバー  
学生の感想



三宅映未

今年で二年目を迎えた結チームの活動は、「つながり」という言葉を意識した活動となりました。学生と参加者のつながり、参加者同士のつながり、更に参加者から広がっていくつながりへと、展開を遂げることができたかと思います。ワークショップの企画運営には不安要素もありましたが、結果的には参加された方々の笑顔と交流がみられる、充実した活動になったと思います。

個人的に、ワークショップや復興支援という活動には消極的でしたが、今回の活動を通じてその認識に変化がありました。支援「している」のでも「されている」のでもなく、互いを知り、自分を知るためのきっかけとして活動があるのだと感じました。学生4名という少数のチームでしたが、企画を無事に運営できたのは、多くの皆様にご協力頂いた賜物だと感じております。ともに活動したメンバーや先生のほか、ワークショップ運営にご協力頂いた方々、そして参加してくださった方々に心より感謝申し上げます。



永野真未

私はCRの活動に参加するのは今回が初めてでした。被災された方が参加するという点で、接し方など不自然になってしまわないか、ワークショップ前は不安が大きかったです。しかし、器作りを通じ、皆様と楽しい空間と時間を共有することができました。参加者の中には、避難してきて一人暮らしをされており、寂しいとおっしゃる方もいました。ワークショップで楽しんでもらい、そこでできた人とのつながりが、また新たな楽しみにつながって欲しいと思います。



野口悠梨

1年が瞬く間に過ぎ、活動が段階を経て進む度、何に具体的に取り組めたのか、次に何をすればよいのか、実感として次への緊張感を同時に味わいながら進んでいた。結チームは、CRの中で特に形の残る手仕事を特徴とした活動をしていた所に惹かれた。土をこね、焼き、器というモノを創造する。震災による被害等を破壊とするなら、創造的復興と称するこの活動は再生と位置づけられる。土から一々を作るという点でその言葉に最も似合う活動が結だと感じた。その創造のサイクルに関わる事が出来、とても光栄に思う。



小田島果咲

CR活動を通じ、何かと誰かに関わらうことで、各々状況は違うし、捉え方もそれぞれだし、生きていくのにはいろいろなものを見る力、状況をきちんと判断する力、感受性が必要だと改めて思いました。思い切ってやってみる気持ち、目の前の状況でやりきる力が身についたのではないかと思います。メンバーや参加者の方との交流で、私たちが元気で前向きな気持ちをいただいたように感じ、たくさんの人と活動する楽しさを改めて味わいました。



森田 諒

焼き物で人と人をつなぐというコンセプトに共感して、昨年度に引き続きお手伝いさせていただきました。今年度は運営スタッフの人数が少ないながらも準備段階から丁寧に工夫を重ねることで参加者の満足度も、ワークショップとしての完成度も向上したと実感しています。また昨年度に参加された方が初めて参加された方に生き生きとアドバイスされている姿や招待状としての器を受け取った方が喜ばれている姿にやりがいを感じました。